

『古今著聞集』「小式部内侍が大江山の歌の事」に関する事項③

前回は「藤原定頼」が「小式部内侍」をからかったことまでを説明しました。

ここでまた質問! そんなことしてないのに「どうせ、お母さんに歌を作ってもらってるんじゃないの?」とか、「お母さんがいないと何もできないんだろ?」と人にかからかわれたら、あなたならどう反応しますか?

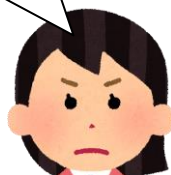
どうしてそんなこと言うの? シクシク……



悔し〜い…。言い返したいけど何も言えない



へ〜…。そういうこと言うんだ。ふ〜ん。



めっちゃ腹立つ こんな奴 無視! 無視!

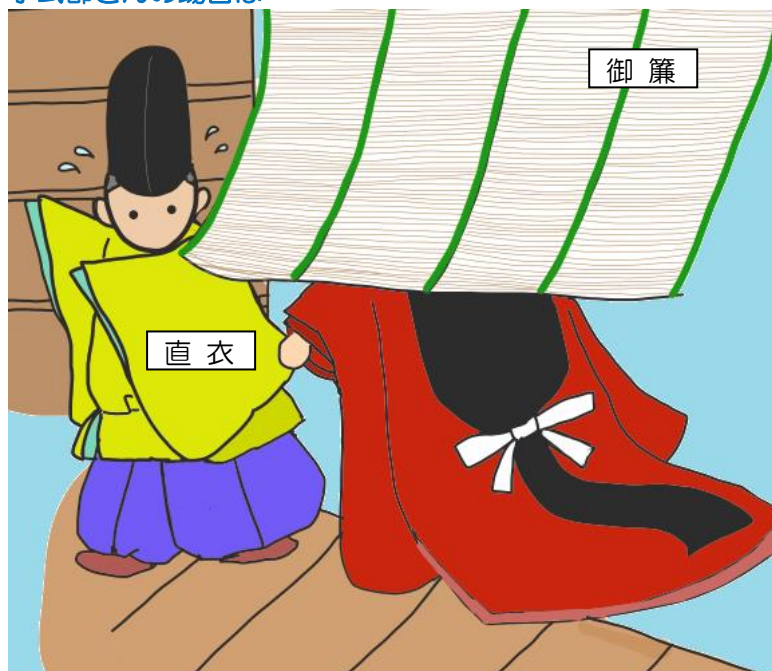


おいコラ! 待たんかい。喧嘩上等じゃ!



こんなあたりですか?

小式部さんの場合は……



御簾（みす）から半分身を乗り出し、意地悪を言った定頼さんの直衣（のうし衣服の一種、貴人の平服）の袖をつかみ

「大江山いくのの道の遠ければ
まだふみもみず天橋立」

<和歌の解釈>

「大江山や生野という所を通って行く、丹後への道が遠いので、まだ天橋立を踏んでみた（訪れた）ことはございません。そのように、母のいる丹後は遠いので、まだ便りもございません。」



「母に代作や助言など頼んでませんよ」

と和歌で返したのです。

この和歌、掛詞や縁語など修辞を凝らした見事なもの。それを即座に詠んで定頼のからかいに応じたのです。定頼はというと、小式部の予想外の行動と見事な和歌に「あさまし=おどろきあきれる」となり、返歌することもできずに、逃げ出したということです。

ちなみに……

和歌を詠みかけられたら、和歌で返すというのが礼儀。返歌もできずに逃げ出した定頼は、ただただ醜態をさらしたという訳です。

一方、小式部内侍の方は、これ以来歌人としての世の評判が出て来たそうです。

おまけ

当時の貴族の女性は、めったなことでは御簾の内から出ることはありません。だから、この小式部の行動は本当に驚くべきことだったのです。よっぽど、腹が立ったのか。それとも、かなりのおてんばさんだったのか……。何にせよ、女性の立場から見ると「いいぞ!」って感じですね。

